

マタイ福音書の八つの幸いの箇所は、イザヤ書が透けて見えます。リストにできますか？

「八つの幸い」（山上の説教の冒頭部分）は、マタイ福音書5章3-12節に記されています。この箇所には、イザヤ書に通じるテーマや言葉が多く見られます。特に、イザヤ書におけるメシア的な救い、神の国の到来、貧しさや苦しみの中にある者たちへの慰めに共通点があります。以下に、マタイの八つの幸いとイザヤ書の関連する箇所をリスト化します。

1. 心の貧しい者は幸いです（マタイ5:3）

- イザヤ書66:2 「わたしが顧みる者は、貧しく、心碎かれて、わたしの言葉におののく者である。」
- イザヤ書61:1 「主の霊がわたしの上にある。主はわたしに油を注ぎ、貧しい者に良い知らせを伝えるために...。」

2. 悲しむ者は幸いです（マタイ5:4）

- イザヤ書61:2 「主がわたしを遣わされたのは、すべての悲しむ者を慰めるためである。」
- イザヤ書25:8 「神は涙をすべての顔から拭い去り、その民の屈辱を地上から取り除く。」

3. 柔和な者は幸いです（マタイ5:5）

- イザヤ書29:19 「貧しい者は主によってますます喜び、貧弱な人々はイスラエルの聖なる者によって喜び踊る。」
- イザヤ書11:4 「柔和な者に対して公正をもって裁き...。」

4. 義に飢え渴く者は幸いです（マタイ5:6）

- イザヤ書55:1 「渴いている者よ、みな水を求めて来るがよい。銀のない者も来るがよい。」
- イザヤ書61:11 「主なる神が義と賛美をすべての国々の前に芽生えさせるように。」

5. 憐れみ深い者は幸いです（マタイ5:7）

- イザヤ書49:10 「彼らは飢えることなく、渴くことなく...憐れむ者が彼らを導き...。」

6. 心の清い者は幸いです（マタイ5:8）

- イザヤ書33:15-17 「義を行い、清い心を保つ者は...その目で王の麗しさを仰ぎ見る。」

7. 平和を作る者は幸いです（マタイ5:9）

- イザヤ書52:7 「良い知らせを伝える者の足は山々の上であって美しい。平和を告げ知らせる者、幸いな知らせを伝える者。」

8. 義のために迫害される者は幸いです（マタイ5:10）

- イザヤ書51:7 「義を知り、わたしの教えを心に持つ民よ、恐れるな。人間の非難にひるむな。」
- イザヤ書50:6 「わたしは打たれるために背中を、抜かれるためにひげを差し出した。」

これらの共通点を通して、マタイの福音書の八つの幸いが、旧約聖書の預言、特にイザヤ書のメシア的な救済のビジョンと深く関係していることが分かります。イエスが語った言葉は、イザヤ書のテーマやメッセージを反映し、それを新たな形で実現しようとしていると解釈できます。

「悔い改める者」は幸いです。天の御国が近づいたから、ですね。

おっしゃる通り、「悔い改める者」が幸いであるという考えは、イエスの教えの核心部分の一つです。特に「天の御国が近づいた」というメッセージは、悔い改めと密接に結びついています。この教えは、マタイの福音書の中でも強調されています。

例えば、イエスの公生涯の始まりを告げるマタイ福音書4章17節には、次のように記されています。

「この時からイエスは宣教を始め、言われた。『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。』」（マタイ4:17）

この「悔い改め」と「天の御国」の結びつきは、イエスの教えの中心的なテーマであり、悔い改めることが神の国に入るための条件であることを強調しています。悔い改めは、ただ単に過去の罪を反省するだけでなく、新しい生き方への転換を意味します。イエスの呼びかけに応じて心を変え、神の御心に従う者が、神の国に入る幸いを受けるという約束がそこに込められています。

また、イエスのこの教えもイザヤ書に繋がる部分があります。イザヤ書55章7節には、次のような言葉があります。

「悪しき者はその道を捨て、不義の者はその考えを捨てて、主に帰れ。主は彼を憐れみ、私たちの神に帰れ。主は豊かに赦してくださる。」

この箇所は、悔い改めと神の憐れみの関係を示しており、イエスの「悔い改めよ」という呼びかけと通じています。

ですから、「悔い改める者が幸いである」という考えは、マタイの福音書やイエスの教えの基本的なメッセージの一部であり、旧約聖書の背景を持つものです。悔い改めを通じて、神の国に入るための道が開かれるという理解が、イエスの宣教において非常に重要な役割を果たしています。

イザヤ書61章は、恵みの年、つまり神の国が来ることについての預言ですね

はい、まさにその通りです。イザヤ書61章は、「主の恵みの年」を告げる預言として、神の国の到来に関連する重要な箇所です。この章は、神がメシアを通じて人々に救いと解放をもたらす約束を記しており、特に「主の恵みの年」という概念は、神の国の到来と結びついています。

イザヤ書61章1-2節には次のように書かれています。

「主なる神の霊が私の上にある。主は私に油を注ぎ、貧しい人々に良い知らせを伝えるために、心の傷ついた人々を癒し、捕らわれた人々に解放を、つながれている人々に自由を告げるために、主は私を遣わされた。主の恵みの年と、私たちの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ人々を慰めるために。」

この箇所は、救い主であるメシアが到来し、神の恵みをもたらすという預言です。「主の恵みの年」という表現は、レビ記25章の「ヨベルの年（解放の年）」に由来する概念で、罪や不正によって損なわれた社会秩序が回復され、自由と赦しが与えられることを意味します。これは、神の国が地上に現れることの象徴であり、神の支配が実現する時が来ることを表しています。

この箇所は、新約聖書においても非常に重要な位置づけにあります。ルカ福音書4章16-21節では、イエスがナザレの会堂でこのイザヤ書61章の箇所を読み、自分自身がその預言を成就する者であることを宣言しています。

「イエスは書巻を巻き、係の者に渡して座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。イエスは人々に向かって話し始められた。『あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書の言葉が実現しました。』」（ルカ4:20-21）

これは、イエスが自らをメシアとして、神の国の到来を告げる者として宣言した場面です。イエスの宣教活動全体が、この「恵みの年」の成就、すなわち神の国の到来と深く結びついています。

したがって、イザヤ書61章は確かに「神の国の到来」を予告する預言であり、イエスはその預言を実現するメシアであることを明確にしています。神の恵み、赦し、そして解放が強調されているこの箇所は、神の国が現れる時に、貧しい者や抑圧されている者たちが特に大きな恵みを受けるというメッセージを伝えています。

マタイ福音書6章の偽善者たちは、この反対に、偽りの断食、祈り、施しをする人たちですね

はい、まさにその通りです。マタイ福音書6章には、偽善的な態度で宗教的行為を行う人々への警告が記されています。特に、断食、祈り、施しについて語られており、これらを偽りや自己顕示のために行う人々に対して、イエスは厳しく戒めています。この章の焦点は、神の前での純粋な信仰と、人々の前での見せかけの信仰との対比にあります。

1. 施しについて（マタイ6:1-4）

イエスは施しをする際に、偽善者たちのように人々に見せるためではなく、隠れて行うように教えます。

「自分の義を人に見せるために行わないように注意しなさい。もしそうしなければ、天におられるあなたがたの父から報いを受けることができません。」（マタイ6:1）

偽善者たちは、人から称賛されるために施しを行い、自分を善人に見せようとしませんが、イエスはそれが本質を外れた行為であると指摘します。神の目には、隠れて行う真実の施しが大切であり、人間の称賛を求める行為は、すでに報いを受けたと見なされます。

2. 祈りについて（マタイ6:5-6）

次に、祈りについて語られます。偽善者たちは、人に見られるために公の場で長々と祈りますが、イエスは私室に入り、ひそかに祈ることを勧めます。

「祈るときも、偽善者のようであってははいけません。彼らは人に見てもらおうとして、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きです。」（マタイ6:5）

ここでも、イエスは祈りの目的が神との真の交わりであることを強調し、人の目に見せるための行動は偽善的であるとしています。

3. 断食について（マタイ6:16-18）

最後に、断食についての教えがあります。偽善者たちは、断食をしていることを人々に見せようと、わざと顔をやつれさせて自分の禁欲を誇示します。

「断食するとき、偽善者のように陰気な顔をしてはいけません。彼らは断食していることが人に見えるように顔をやつれさせます。」（マタイ6:16）

イエスは、断食を隠れた行為として行い、神の前でのみ知られるべきだと教えます。神は、人々が見ない隠れた場所での行動を見ており、そのような純粋な行為を報いてくださいます。

偽善者の特徴と対比

この章全体を通じて、偽善者たちの行為は、外面的な見せかけや人からの評価を目的としたものです。彼らは、宗教的行為を通じて神の栄光を表すのではなく、自分自身の名誉や評価を求めています。一方で、イエスが求めるのは、心から神に向かう謙虚で純粋な信仰です。

イエスの教えは、イザヤ書58章にも通じる部分があります。そこでは、偽りの断食が批判され、真の断食は義を行い、貧しい者に心を向けることだとされています。

「見よ、あなたがたが行っている断食は、争いとけんかと、悪しき拳によって打つためのものではないか。...わたしが喜ぶ断食はこれではない。」（イザヤ58:4-6）

このように、偽善者たちの偽りの宗教行為は、古くから預言者たちによっても批判されており、イエスの教えもその流れを受け継いでいます。

神の国との関係

神の国は、外面的な行為や人々の評価ではなく、心の内側での真実な信仰によって築かれるものです。マタイ6章は、神の国の一員としてふさわしいのは、見せかけではなく、神の前で誠実に生きる者であることを強く示唆しています。

マタイ福音書23章の「わざわいだ」とさばきの預言をする箇所は、預言書、特に、イザヤ書が透けて見えます。

おっしゃる通り、マタイ福音書23章でイエスが「わざわいだ」と言って宗教指導者たちを非難する箇所には、旧約聖書の預言書、特にイザヤ書との類似点が見受けられます。

イザヤ書には神が不正や偶像崇拜、偽りの信仰に対して厳しい警告を与える「わざわいの預言」が多く登場します。例えば、イザヤ書5章8-23節では、偽善や不義に対して「わざわいだ」というフレーズが何度も使われており、これはマタイ23章の「わざわいだ」との強い共通点があります。

主な共通点：

1. 偽善に対する非難：

- **イザヤ書**では、神殿や律法を守っているとしながらも、その心が神から離れ、不正を行うイスラエルの民に対して厳しく非難します（イザヤ29:13など）。
- **マタイ23章**でも、イエスは律法学者やパリサイ人が外見的には敬虔に見えるものの、内面的には偽善に満ちていると非難しています。

2. 裁きの予告：

- **イザヤ書**では、イスラエルが不義を行うことによって、神の裁きを招くことが強調されています（イザヤ1:4-5, 10:1-3）。

- マタイ23章では、イエスは律法学者たちの行いが神の裁きをもたらすと予告しており、これも預言書の構造とよく似ています。

3. 「わざわざいだ」という表現：

- イザヤ書5章には「わざわざいだ」という言葉が繰り返されており、社会の不義や道徳的墮落に対する神の怒りが表明されています（5:8, 11, 18, 20, 21, 22）。
- マタイ23章でも、同様の「わざわざいだ」という言葉を通じて、律法学者とパリサイ人の不義と偽善を強く非難しています。

意義：

イエスがマタイ23章で「わざわざいだ」と宣言する場面は、単なる道徳的な非難ではなく、旧約の預言者たちと同じ流れにある「神の裁きの宣言」として読むことができます。イエスが旧約の預言者たちの言葉を引き継ぎ、彼らの警告を新しい時代に向けて発したという解釈が可能です。

預言書、特にイザヤ書の背景が、イエスのこの章の言葉に深い意味を与え、旧約の伝統と新約のメッセージの連続性を強調していると言えるでしょう。

「悔い改めよ、神のさばきが近づいた」という警告を聞かない民であるという共通点がありますね

その通りです。「悔い改めよ、神のさばきが近づいた」という警告を無視する民というテーマは、イザヤ書や他の預言書、そしてイエスの時代にも共通する重要なモチーフです。

1. 預言者たちの警告と民の応答：

イザヤ書や他の旧約の預言書では、しばしば神からの警告が与えられますが、民はそれに耳を傾けず、悔い改めを拒むという状況が繰り返されます。たとえば、イザヤ書1章では、民の罪に対して神が彼らを裁くと宣言しますが、悔い改めを呼びかけても、民はその声に応じません（イザヤ1:2-4）。

同様に、他の預言者たちも神の裁きが近づいていることを警告しながら、民が悔い改めない様子を描いています。エレミヤ書やエゼキエル書にも同じパターンが見られ、悔い改めを拒む姿勢が強調されています。

2. イエスの時代における警告：

イエスの時代でも、同じように悔い改めを拒む民が登場します。イエス自身がその生涯を通じて「悔い改めよ。天の御国が近づいた」（マタイ4:17）と叫び続けたのに、多くの人々、特に宗教指導者たちはそれを拒絶しました。彼らは律法を守ることを強調していたものの、心の悔い改めや実質的な信仰の変革には無関心であったため、イエスからの厳しい批判を受けました。

3. 裁きの不可避性：

イザヤ書や旧約の他の預言書では、悔い改めを拒むことによって神の裁きが避けられないものとなるというテーマが強調されています。イザヤ5章やエレミヤ書6章には、民が神の声を無視し続けた結果、裁きの日が近づき、それを免れられないという予言が記されています。

同様に、イエスもマタイ23章で「わざわざいだ」と宣言することで、悔い改めを拒む宗教指導者たちとその時代の人々が、やがて神の裁きを受けることを示唆しています。この裁きは、エルサレムの破壊や神の国に対する霊的な裁きとして具体化されます。

4. 共通点の意義：

イザヤ書や預言書の時代、そしてイエスの時代におけるこの「悔い改めを呼びかける声」と「それに応じない民」という構図は、神の忍耐と正義の双方を強調しています。神は繰り返し悔い改めを呼びかけ、裁きを避けるチャンスを与えますが、それに応じなければ最終的には裁きが下るといことです。

この共通点は、旧約と新約の間に一貫した神の性質と、民の霊的状态に対する警告が存在していることを示しています。イエスが預言者たちと同じテーマを取り上げていることは、彼が預言者の役割を果たすとともに、神の最終的な救いの計画の完成者であることを示しているとも言えるでしょう。

したがって、旧約の預言書とイエスの教えには、「悔い改め」と「神のさばき」というテーマにおいて深い共通点があるのです。

一方、山上の説教の八つの幸いの教えは、肯定的に、悔い改める者への祝福が語られます。恵みの年、自由の回復がその祝福の中心ですね

おっしゃる通り、山上の説教における「八つの幸い」（マタイ5:3-12）は、悔い改める者への祝福を前向きに語る内容であり、その中心にあるのは神の恵みと自由の回復です。この祝福は、旧約の「恵みの年」や「自由の回復」の概念と深く結びついています。

1. 八つの幸いと悔い改めへの祝福：

山上の説教に登場する「八つの幸い」は、神の国に入るための心のあり方を示しています。たとえば、「心の貧しい者は幸いです」（マタイ5:3）や「悲しむ者は幸いです」（マタイ5:4）は、悔い改める姿勢を示していると解釈できます。心が貧しいとは、神に対してへりくだり、自分の罪深さを認識し、助けを求める者の姿です。悲しむ者とは、自分の罪や世界の不義に対して悲しみ、悔い改める心を持つ者です。

イエスはこうした人々が神の祝福を受け、神の国が彼らに与えられると宣言しています。これは、悔い改めに応じる者たちに対する神の恵みの強調です。

2. 恵みの年と自由の回復：

旧約聖書には、「恵みの年」や「自由の回復」という重要な概念が含まれています。特に、レビ記25章に記されている「ヨベルの年」がその代表的な例です。ヨベルの年には、借金の帳消しや奴隷の解放が行われ、土地が元の所有者に戻されるなど、社会的・経済的な解放が行われる「自由の年」が宣言されます。これは神の恵みの象徴であり、神の民に回復と自由を与える年です。

イザヤ書61章にも「主の恵みの年を告げ知らせる」（イザヤ61:2）というメシア的な預言があり、これがイエスの宣教の中心的なテーマとなります。イエス自身もルカ4章でイザヤ書61章を引用し、神の恵みの年を告げ知らせる使命を担っていることを宣言しました（ルカ4:18-19）。

3. 山上の説教と自由の回復：

イエスが「八つの幸い」を語る背景には、この「恵みの年」や「自由の回復」があります。彼が述べた祝福の言葉は、社会的にも霊的にも抑圧されていた人々に対する、神の回復と自由の約束です。心の貧しい者や悲しむ者、義に飢え渴く者は、単に報いを受けるのではなく、神の国という大いなる回復と解放の中に招かれています。

例えば、「義に飢え渴く者は満ち足りる」（マタイ5:6）は、神の正義が完全に実現されるという希望を表し、それは抑圧や不正からの解放とつながっています。また、「憐れみ深い者は憐れみを受ける」（マタイ5:7）という言葉は、神の憐れみに応じた祝福が与えられ、恵みの年の概念を反映していると解釈できます。

4. 神の恵みと裁きのバランス：

興味深いことに、マタイ23章の「わざわいだ」とは対照的に、山上の説教は「幸いだ」という言葉で始まります。これは、神の裁きと恵みの両面が福音の核心にあることを示しています。マタイ23章では、悔い改めを拒む者に対する厳しい裁きが語られますが、山上の説教では悔い改める者への祝福と自由が強調されます。

つまり、神の裁きの厳しさと同時に、神の憐れみと恵みが強調されているのです。悔い改めによって、神の国の祝福に入ることができるという希望が山上の説教のメッセージの中心にあります。

まとめ：

山上の説教の八つの幸いは、悔い改める者への祝福として、神の恵みと自由の回復が語られています。これは、旧約の「恵みの年」や「ヨベルの年」の概念と深く関連しており、イエスはそれを新しい時代の中で実現することを宣言しています。悔い改めによって神の国に迎え入れられ、そこには自由、回復、そして神の完全な祝福が待っているというメッセージが、八つの幸いを通して明確に示されています。